

最近目にした「西學東漸」と言語文化接触に関する書物

内田慶市

1. 『西遊地球聞見略傳』（ロンドン大学 SOAS 蔵）

本書については、たとえば以下のような記述がある。

Dr. M. has also published a a small book, called 'A Voyage round the World;' designed to enlarge the minds of the lower classes of the Chinese in respect to mankind generally, and to introduce among them a knowledge of the essential truths of Christianity. To this pamphlet is annexed a map of the world, in which Judea is designated as the country 'where Jesus, the Saviour of the world was born.' (Morrison, Eliza: *Memoirs of the life labours of Robert Morrison*, Vol.II, London, 1839, pp.32-33)

西遊地球聞見略傳 Tour of the world. 29 leaves, 1819.

In this geographical brochure, the traveler says, he belongs to Sze-chuen province -- relates the motives that led him to undertake his travels -- passes through Tibet- and part of India- embarks at Calcutta for France- relates the state of education in that country and in Europe- studies foreign literature- western opinions on the origin of the universe- European views of the globe- a map of the world, with explanations- division of time in Europe- the sabbath- nature of European governments- customs- religion- he returns to China by way of America- but is wrecked on the coast of Loo-choo- and obtains a passage from thence in a Fuk-keen ship bound to Canton. (Wylie: *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese*, Shanghai, 1867, p.5)



Xiyou diqiu wenjian luezhuan n.d. (1819) RM 836

A record of a journey supposedly undertaken by "Chenyou jushi" ("Dusty Traveller") from China to Europe via India, the author's three-year sojourn in Paris, and his return to China via America. Actually written by Robert Morrison (1782-1834) in 1819 (cf. *Memoires of the Life and Labours of Robert Morrison*, vol.II pp.32-33) . With a three-colour polychromatic map of the world. (Andrew C. West: *Catalogue of the Morrison Collection of Chinese Books*, SOAS. p.68)

本書の体裁は以下の通りである。

19.9x10.6 cm、6行17字、版心に「西遊地球聞見略傳」とある。

扉：「中外一家、天無私心止分善惡而已」「西遊地球聞見略傳」「華英兼述」

序跋：塵遊居士序。

本書の詳しい内容等については稿を改めることとして、ここではその言語的特徴についてのみ簡単に触れておく。一言で言えば、以下の各文における下線部で示した語や用法に見られるがごとく、モリソンの他の著作に比べて、極めて口語的な中国語であることが言えるだろう。

他乃當為假神

到加利古打後，即起意要學該處的字語，因早覺得以遊學者，只用眼看，不甚事，必要念一國之書，及回上一派之人交接舒晤，方可略明其處之得失，依斯看來，余即請人指教，並自家早晚攻書，如此學待過了一年有餘，方可能頗曉該處各書內之義也。

學過了西域之書，某心內主意有些不定，或在陸路往西好，或駕洋船微妙，若在陸路則辛苦，若在水路危險，兩樣皆難，只是世間凡事美險相近，倘要成功，不可困難縮手，緣此想來想去後，即立志飄洋西發。

船揚帆離岸遠望而不見時，某心下略惶，惟過了數日，並未遇狂風，則漸著膽，晝食夜眠，如平地無異，船人以行船

看官 意思 時辰 總然 你 天老爺之主意 一定不差錯 未曾 做閒事 他們的 差不多 不曾見過 給雲接不復見也 你不要以來到之路回國

近來察得明哲

我們立著此地 有時而用個單天字，指著天上之主宰

有了一書，則必先有一人纔可得成書也

西邊一日間食有兩次，亦有三次，所食係麵，肉，魚，雞，酒，茶等物，於食時最嚴的事大家同盤食，亦不係用筷子，乃用的係刀叉，兩器，伊等先食後飲酒，不是先飲酒後食飯すなわち、人称代名詞、時態助詞、介詞、方向動詞等で特にそれ（口語成分）が顯著に見られる。

また、次のような語も興味深いものである。

上帝 西經

人類 自主 不自主 自主之國 國政 眾舉 議國政 兩部議

中帶

拉定話 拉體納話 黑人蠻民

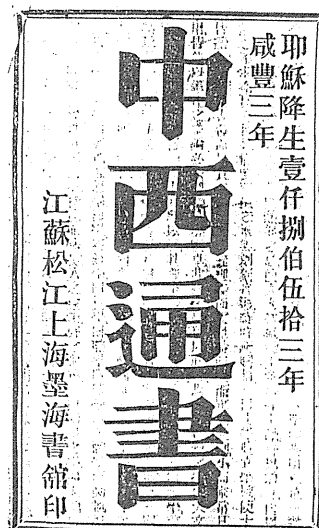
加利古打 身毒國 巴利士 法蘭西國 羅馬 額利西亞 意大理亞 波耳土其（大西洋） 米利堅國，俗稱花旗 加拉巴地，或稱茶花 非拉答非亞城 基連瓦時

阿米利加 或云 亞墨利加

2. 『中西通書』（プリンストン大学図書館、オーストラリア国立図書館蔵）

本書の書誌については、以下の Wylie1867 に詳しい。

華洋和合通書 Hwa yang ho ho t'ung shoo. Chinese and Foreign Concord Almanac. This is the title of the first number, for 1852, of an annual which was continued in subsequent years under the title 中西通書 Chung se t'ung shoo. The first number is in 27 leaves, and contains a preface, table of contents, 24 divisions of the year at Peking, equation of time for various places throughout the world, eclipses, calendar containing phrases of the moon, comparative table of Chinese and English days, and the various celestial phenomena. This is followed by a Chinese and European comparative chronology, an exhortation to improve the time, three forms of prayer, and five other



religious articles. The number for 1853, in 39 leaves, is a counterpart of the preceding as far as the end of the calendar; after which is a historical sketch of Judea with a map, six religious articles, two forms of prayer, and a series of scientific articles illustrated by figures, on the conic sections, the solar system, motion of light, precession of the equinoxes, optics, nebulae and the planets, concluding with a chronology of scientific discovery. The issue for 1854, in 37 leaves, has, in addition to usual commencement, an English preface. After the calendar are five articles of a religious tendency, followed by short treatises on Gravitation and Optics.

(Wylie: *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese*, 1867, p. 188)

日本では八耳 1996 によれば、これまでに、大谷大学に 1859 年のものが、関大増田文庫等に 1860 年のものが所蔵されているのが確認されているだけであり、特に創刊号（1853）については中国をはじめアメリカ、ヨーロッパでもその所在がつかめなかったものである。今回、偶然これの所在をつきとめることができた。なお、コピーの労を煩わせた関西大学大学

院生牧野格子氏に感謝する次第である。

創刊号（プリンストン大学図書館蔵）は Wylie の記述にあるように全 39 葉であり、その目次は次の通りである。

<1853 年の目次>

中西通書序 (1a-b)	艾約瑟
凡例 (1a-2a)	
中西通書目録 (2b)	
都城順天府節氣時刻 (1a-1b)	
中外各地時刻表 (2a-2b)	
日月交食時刻 (3a-3b)	
中西月日 (4a-15b)	
猶太國傳併附猶太國圖 (16a-19b)	
耶穌受難以顯仁義論 (20a-21a)	
耶穌受難代眾獻祭論 (21a-21b)	
守安息日規 (22a-22b)	
悔過禱文 (23a)	
信主禱文 (23b)	
人貴於萬物論 (24a-24b)	
雜說 (25a-25b)	
聖經考 (26a)	
曲線圖說 (26b-27a)	＝『西學圖說』曲線圖說 19a-20a
行星環繞太陽圖說 (27b-28a)	＝『西學圖說』行星環繞太陽圖說 2b-3b
光動圖說 (28b)	＝『西學圖說』光動圖說 14b-15b
歲差圖說 (29a-30a)	＝『西學圖說』歲差圖說 9b-11a
光學圖說 (30b-32b)	＝『西學圖說』光動圖說 15b-19a
星氣說 (33a)	＝『西學圖說』星氣說 8b-9b
格致新學提綱 (33b-36b)	＝『西學原始考』26b-

格致関連の記事は、王韜の『西學輯存六種』に収められている「西學圖說」の各章と字句、図とも同じである。ただ、「光學圖說」という章は、「西學圖說」では「光動圖說」にまとめられている。

「格致新學提綱」は同じく王韜の『西學輯存六種』に収められている「西學原始考」の元になっていると考えられるが、「格致新學提綱」は元号により並べられているのに対し、「西學原始考」では西暦が使われ、また、大幅な増補が行われている。

<1854年の目次>（プリンストン大学図書館及びオーストラリア国立図書館蔵）

中西通書序 艾約瑟（1b-2b）
凡例（1a-2a）
中西通書目録（2b）
順天府節氣時刻（1a-1b）
中外各地時刻表（2a-2b）
日月交食時刻（2b-3b）
中西日月（4a-16b）
堅心信主論（17a-17b）
勸入至善論（18a-18b）
聖神感人論（19a-19b）
保羅傳（20a-21b）
聖經名山説（23a-23b）
聖經名海説（22a-22b）
萬物互相牽引論（目次のみで本文なし）
光學説略（同上）
22b/30 地圖

今回、オーストラリア国立図書館蔵のものも入手できたが、やはりプリンストン大学蔵と同様に、「聖經名山説」と「聖經名海説」は目録とは前後が逆に収められており、「萬物互相牽引論」と「光學説略」が収められていない。また、地図の配置も同じ場所で、その葉数は22bと30aになっている。

つまり、1854年のものは、全部で26葉である。

3. 『衍緒草堂筆記——摘録論文淺説』

何2000に次のような記述が見られる。

かつて、J.エディキンスは『上海方言文法』の中で、畢華珍及びその著書『衍緒草堂筆記』に言及し、これを高く評価している。

文章の規則あるいは作文演習は確立しているが、それらは中国語文法を形成するものではない。文法学が中国人にとって未知の科学であった時代において、前項で述べたように彼[畢華珍]が西洋式の[品詞の]分類に著しく接近し、最も重要な品詞に正確な定義を与えたことは、著者の知性を示す証拠である。

この人物及び当該著作は中国文法学説史に重要な位置を占めるべきであるが、この分野

の著作や研究論文などでは、管見の及ぶところこれに言及したものは皆無であった。(何群雄『中国語文法事始』三元社 2000, pp.131-132)

何氏はこのように述べ、エドキンスの著作に基づいてこの畢華珍の品詞分類について説明しているが、「数年前かに筆者は中国の複数の図書館に照会したが、いずれからも否定的な返事しか得られなかった。現在なお同所の所在は不明のままである」(p.132) と述べているように、氏もこれまで本書の所在をつかんではいなかった。

ところが今回ふとしたことから、この所在が明らかになった。オーストラリア国立図書館であるが、実は同館の目録には『衍緒草堂筆記』ではなく『論文浅説』として収められていたのである。

体裁は以下の通り(書影参照)。

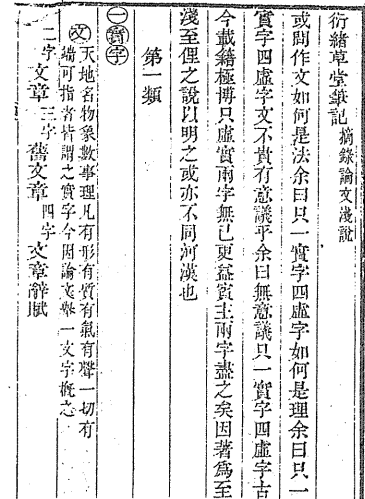
初葉表の1行目に「衍緒草堂筆記摘録論文浅説」とあり、半葉9行。全8葉。

9葉目から葉数を改めて、「論文續説」とあって19葉まで。

さらに、20葉から再び葉数を改めて「餘論四則」として4葉。

その後、「四言句格」2巻(序=2葉、卷上=7葉、卷下=10葉)が続いている。

馬氏文通以前の中国人の手による、伝統的な虚実論を継承しながら、恐らく最初でしかも体系的な品詞分類、句法論として、本書は中国文法学説史上極めて重要な資料となるはずである。しかも、本書が近代のヨーロッパ人の文法記述にも大きな影響を与えたことは注目されてよいであろう。詳細については、いずれ公表するつもりである。



4. 『登瀛篇』(オーストラリア国立図書館蔵)

『語言自選集』(1867初版)の序文に次のようにある。

The Ten Dialogues of Part IV, which come next were dictated by me to a remarkably good teacher of the spoken language, who of course corrected my idiom as he took them down. The matter of most of them is trivial enough, but they give the interpreter some idea of a very troublesome portion of his duties, namely, the cross-examination of an unwilling witness. It was with this object that they were composed.

The Dialogues are followed by the Eighteen Section, the term section being chosen for no

reason but to distinguish the divisions of this Part V from those of the foregoing parts and of the next succeeding one. The phrases contained in each of its eighteen pages are a portion of a larger collection written out years ago by Ying Lung-T'ien. I printed the Chinese text of this with a few additions of my own in 1860. Finding them in some favor with those who have used them, I have retained all but my own contributions to the original stock, or such phrases in the latter as are explained in other parts of this work, and now republish them as a sort of continuation of Part III. The contents of that part are in Chinese styles San Yü, detached phrases; those of the fifth part are Hsü San Yü, a supplement to those phrases. The intermediate Dialogues are Wên Ta Chang, question and answer chapters, and the papers which follow in Part VI, are T'an Lun P'ien, or chapters of chat, for distinction's sake entitled The Hundred Lessons. These last are nearly the whole of the native work compiled some two centuries since to teach the Manchus Chinese, and the Chinese Manchu, a copy of which was brought southward in 1851 by the Abbé Huc. Its phraseology, which was here and there too bookish, having been thoroughly revised by Ying Lung-T'ien, I printed it with what is now reduced to the Hsü San Yü; but it has since been carefully retouched more than once by competent natives. (Preface X-XI)

試みに日本語に訳しておく。

Part IV の 10 の会話は、私の述べることを口語のすばらしい教師に書き取らせたものである。もちろん、彼は書き留める際に私の表現の誤りを正してくれた。

それらのほとんどのものは、きわめてあるふれたものであるが、それでも、通訳が自分の職務上における大変やっかいな部分へのいくつかの示唆を与えている。つまり、好ましからざる証言への反対尋問などで、その目的のためにこれらは作られたのである。

次に、18 章からなる会話が続くが、それぞれの章の節句は、別にその理由もなく選ばれたもの（つまり特にある場面設定をしたり、会話が関連しているというものではないこと—内田—以下同じ）であり、ただ Part V の部分を、前の部分（つまり Part IV）と次の部分（Part VI）とから区別するためだけのものである。この 18 ページにそれぞれ含まれる表現は、何年か前に應龍田によって著されたより大きな短文集の一部であり、私はこれの中国語の部分で私自身のいくつかの増補を加えて 1860 年に印刷した。ただ、それらをすでに使ったことのある人のことも考えて、私自身が元のものに書き加えた部分、あるいはこの本の他の部分で説明されているような表現を除いては、Part III の続きのようなものとして再版することにした。Part III の内容は、中国式の「散語」=detached phrase と、5 番目の部分の内容は「續散語」=Part III への補

篇である。

中級会話は「問答章」——問いと答えの章であり、それに続くのが Part VI で「談論篇」——あるいは「おしゃべり」の章であり、他と区別するために 100 課と名付けられた。

この最後のものは、2 世紀前から満州人に中国語を、あるいは中国人に満州語を教えるために編集された、ネイティブの手になるほとんどすべてであり、この本は 1851 年に Abbe Huc によって（南方に）もたらされたものである。ただ、あちこちに余りにも文言調のものが見られるその文体は應龍田によって徹底的に改訂された。私はそれを今、續散語として生まれ変わったものと共に印刷したが、しかし、それは有能なネイティブによって注意深く何度も加筆修正がなされている。

この序文からは、以下のようなことがわかる。

(1) 應龍田により作られ、ウェイドによって加筆されたものが 1860 年出版の『問答篇』と『登瀛篇』で、この 2 書の序文は以下のように同じものである。

論語子所雅言，舊説謂雅言，猶後世之官話，古者有瞽史大行人，聽聲音諭書名之掌。後世但以京話士大夫所習語言為官話，直省之方言不得並焉。入官者非先能官話，則齟齬而跲於辭。予奉命來中土，職兼教習翻譯事務，因應龍田以官話設為問答，筆之於篇，又為登瀛篇。是二編也，誠後學之舌人翻譯之嚆矢也。刊成於上海官舍，因書其首。

降生一千八百六十年四月初七日 英國威妥瑪序

(2) 清文指要系統の満漢課本 (Abbe Huc によってもたらされる) → 應龍田による『問答篇』 → 「談論篇百章」(ネイティブによる加筆修正) と、

(3) 應龍田による大型の短文集 → 『登瀛篇』 → 「續散語十八章」と、

(4) 『登瀛篇』は、その後再版された？

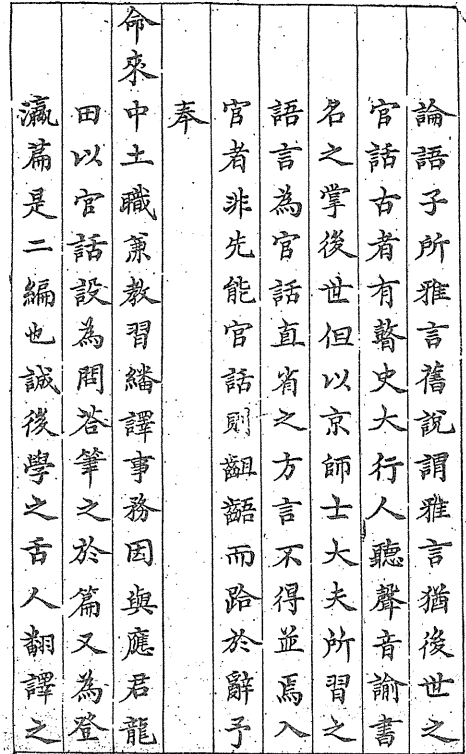
今回、この『登瀛篇』を入手出来たのであるが、『自邇集』の「續散語十八章」と対照した結果、『登瀛篇』の第 11 章から第 48 章までから「續散語十八章」の文は採られていることが明らかになった。

なお、高田 2001 によれば、『語言問答』(刊行年、発行場所等不詳)の後半部分が「續散語十八章」となっており、それは『自邇集』の「續散語十八章」と同じであるという。してみると、『語言問答』は『登瀛篇』の焼き直しであるかも知れない。ただ、拙著 2001 でも触れたように、『語言問答』の前半部分はゴンサルベス(J. A. Goncalves)の『漢字文法 *Arte China constante de alphabeto e Grammatica*』(Macao, 1829)の第 5 章「Dialogos 問答」のそれと全く同じのものであり、『登瀛篇』の編者である應龍田とゴンサルベスの関係も興味深い点である。

『登瀛篇』の言語的特徴については、これも詳細は別稿にゆずるが、いわゆる太田辰夫氏の「北京語の文法特點」の7つのうちの6つはクリアーしており、また、名詞、代名詞、動詞等々の使用法もほぼ北京語あるいは北方語と認められる。ただ、いわゆる旗人語的なものは少ないように思われ、この点が、『問答篇』との違いのように感じられる。

すでに紙幅が尽きたので、以下は書名のみを掲げることとする。

5. STEPHEN WESTON: *FAN-HY-CHEU: A TALE IN CHINESE AND ENGLISH: WITH NOTES, AND A SHORT GRAMMAR OF THE CHINESE LANGUAGE*, London, 1814



1864年4月初7日の日付のある威妥瑪の序文

6. *The English and Chinese Student's Assistant, or Colloquial phrase, letters &c, in English and Chinese. The Chinese by SHAOU TIH, A native Chinese student, in the Anglo Chinese College, MALLACCA, printed at the Mission Press, 1826*

7. その他

二帙字典西譯比較 Being a parallel drawn between the two intended Chinese Dictionaries: by the Rev. Robert Morrison and Antonio Moutucci, LL.D, London, 1817.

Zottoli の一連の著作; Brueyre, Benjamin の字典、などなどである。

参考文献

八耳俊文 1996 「19 世紀中期の中国人における西洋人宣教師の科学啓蒙活動についての基礎的研究」『科研費研究成果報告書』
 高田時雄 2001 「トマス・ウェイドと北京語の勝利」『西洋近代文明と中華世界』京都大学出版会
 内田慶市 2001 『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部